

# 米軍記録に見る「酒田空襲」

門松 秀樹

東北公益文科大学総合研究論集第48号 抜刷

2024年8月30日発行

## 米軍記録に見る「酒田空襲」

門松 秀樹

### はじめに

酒田は酒田港という日本海における重要港湾を擁する都市であり、太平洋戦争当時においても軍需物資等の輸送の拠点として機能していた。かかる酒田の港湾機能を封ずるため、昭和20年（1945）6月30日未明にB29「スーパーフォートレス」約10機が酒田上空に侵入し、酒田港に対する機雷の空中散布を行った。その結果、酒田港浚渫船「阿賀丸」（529トン）と「東雲丸」（70トン）が酒田港内において触雷して沈没し、死者1名と負傷者数名が出ることとなった。これが、酒田が空襲を受けた最初の事例となる。その後、昭和20年8月10日の午前9時過ぎより正午頃までにわたって米艦載機部隊によって酒田は空襲を受け、船舶や港湾施設、鉄道施設などに被害を生じたほか、多数の死傷者を出した。この8月10日の空襲は、「酒田空襲」として今日まで記憶されている。

しかし、「酒田空襲」を受けて間もなく、8月15日に終戦を迎えたこともあるためか、「酒田空襲」について十分な資料や記録が残されているとは言い難いように考えられる。酒田警察署による『酒田空襲状況』や酒田市による『酒田市事務報告書』における記載が、公的な機関による「酒田空襲」に関する数少ない記録であり、その他には、「酒田空襲」の体験者の回想が数件残されているに留まる。

そこで本稿では、「酒田空襲」を行った米艦載機部隊が作成した戦闘報告書の内容を検討し、これと日本側の資料を対照していくことを通じて、「酒田空襲」の実態の解明を試みていくこととしたい。なお、米艦載機部隊の戦闘報告書は、国立国会図書館デジタルコレクションに収録されており、原史料については米国国立公文書館が所蔵する『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey』を参照するものとする。

以下、本稿第1章では、『酒田空襲状況』や「酒田空襲」体験者の回想などに

に基づき、日本側の資料から見た「酒田空襲」の状況を整理する。また、第2章では米艦載機部隊の戦闘報告書に基づき、米軍側の資料から見た「酒田空襲」の状況を整理する。そして第3章において日米双方の資料を対照し、「酒田空襲」の実態について考察を加えることとしたい。

## 1 「酒田空襲」時における酒田市

### (1) 『酒田空襲状況』

昭和20年8月10日午前、酒田市は米機動部隊艦載機による空襲を受けた。いわゆる「酒田空襲」であるが、空襲当時の状況については、空襲体験者による回想や体験談を除くとあまり記録が残されていない状況であるといえる。かかる状況において、酒田警察署によってまとめられた『酒田空襲状況 昭和二〇年八月一〇日』（以下、『酒田空襲状況』とする一筆者註）は、数少ない公的機関による空襲に関する記録であるといえよう。『酒田空襲状況』は手書きで4頁ほどの報告書となるが、以下にその内容に基づいて「酒田空襲」について整理する。なお、史料からの引用に当たっては、適宜、新字体・新仮名遣いに改め、句読点等を追加するものとする（以下、同様）。

まず、空襲の概要については、「八月十日空襲並被害状況」として、以下のよう

八月十日午前九時、空襲警報発令後、間もなく敵機の爆音聴取。同時に味方高射機関銃の銃声に接し、敵機の酒田市侵入を確知。全員部署につく。数分後、敵グラマンF6F十六機宛酒田駅方面より侵入、急降下。酒田駅、第一国民学校、更に港湾地帯を銃撃し、数回反復。十一時頃、一時中止したるも、更に十一機の編隊を中心に反復銃爆撃し、午後零時五分退去する迄、三時間余りに亘り、署員一同酒田防衛の為の決死活動を展開したり。

8月10日の午前9時から11時にかけての第一波と、午前11時から午後0時5分にかけての第二波により、それぞれ「グラマンF6F」16機と11機から成る米

艦載機部隊による空襲を受けたということや、「味方高射機関銃」による迎撃が行われたことなどを確認できる。

次に、空襲による被害等については以下のように記載されている<sup>2</sup>。

- (1) 飛来機数第一回十六機 第二回十一機 計二十七機
- (2) 投下弾 五十七疋と認められるもの、鉄興社大浜付近八個を始め、岸壁、第一国民学校、四ヶ浦漁業組合、酒田駅付近その他に対し、計三十二個

#### A 建物被害

- (イ) 第一国民学校雨天体操場を除く全校舎大破
- (ロ) 鉄興社酒田大浜工場第三工場脱水場外二ヶ所半壊、其の他各所に建物被害を生ず  
(隣組接「ママ」帝マグ「帝国マグネシウム」引用者註) 工場も同様)
- (ハ) 船場町商業合資会社倉庫、南亜企業倉庫倒壊。その他付近民家に被害あり
- (ニ) 酒田駅裏上林製作所倒壊大破
- (ホ) 内務省酒田港工事々務所全焼
- (ヘ) 四ヶ浦漁業組合事務所半焼
- (ト) その他各所に小被害発生あり

#### B 艦船その他の被害状況

- (イ) 酒田港
  - 1. 貨物船正吉丸 九七〇噸
  - 2. 油槽船南輝丸 七〇〇噸右は何れも火災発生後沈没。その他機帆船にも小被害あり

- (ロ) その他  
吹浦村付近にも我が海防艦敵機と交戦、火災発生後沈没す

#### C その他施設の被害状況

- 1. 酒田港に設置しありたるクレーン二基破損
- 2. 最上川に架しある両羽橋の欄干約二十五米両側破損。橋梁四箇所

に経一尺の貫通口発生す（交通に支障なし）

### 3. 酒田駅及港駅の貨物車旅客数輻破損す

#### D 人畜の被害状況

死亡 一六名

行方不明 一四名

重傷 一五名

軽傷 一八名

その他負傷するに至りたるもの相当数あり

右死亡者中、海軍兵一、華（中国人一引用者註）労務者二あり。重軽傷患者数は夫々救護病院に収容、手当を加えたり

地上部隊の戦果として伝えらるゝところによれば、敵機隊（ママ。墜カ？）数三機なりと云う

「酒田空襲」における被害は、港湾地域における軍需物資の生産工場や倉庫群を中心として、鉄道車両の破損、両羽橋の損傷、貨物船およびタンカー、海防艦の沈没など広範に及び、30名の死者・行方不明者と33名の重軽傷者など、多くの人的な被害もまた受けているといえ、これらの被害は、「グラマンF6F」による機銃掃射と32発の「五十七疋」爆弾によってもたらされたとされている。

一方で、防空部隊の反撃による米軍機3機撃墜の伝聞情報についても記載されている。

『酒田空襲状況』の他に「酒田空襲」について記載された史料としては、『酒田市史』が参照している『酒田市事務報告書』を挙げることができるが、同報告書に基づく『酒田市史』における記述内容は以下のとおりである<sup>3</sup>。

……（前略）軍関係を除いた人的被害は、死者が二八名、負傷者が三七名であった。物的損害は、家屋の全焼が三戸であり、半焼が五、全壊が三、半壊が五、大破が一四、中破が八、損傷軽微は七二戸となっている。船舶の被害では、第二南輝丸（八三四トン）と正吉丸（九七〇トン）が沈没した。酒田港湾浚渫船神通丸（五五八トン）と伊七波山丸（八七三トン）、それに天神丸（七〇トン）などの機帆船三隻が損傷を受けた。第二南輝丸での死

者は四名、重軽傷者七名、神通丸では死者二名、傷者一名を出している。

『酒田市事務報告書』に基づく『酒田市史』の記述では、市内における家屋の被害状況が詳述されているほか、損傷を受けた船舶についての言及があるが、死傷者数については『酒田空襲状況』と若干の差異を認めることができる。

「酒田空襲」における被害状況の実態については、『酒田空襲状況』及び『酒田市事務報告書』に基づく『酒田市史』の双方の内容に基づいて判断すべきであり、港湾地域の軍需工場を中心に、市内の民家や、鉄道や橋梁など広範な地域において被害を受け、貨物船・タンカー・海防艦といった3隻の艦船の沈没に加えて、30名前後の死者・行方不明者と35名前後の重軽傷者という人的損害を被った空襲であった。ただし、艦載機による軍事目標を中心とした攻撃であり、都市機能の破壊を目的とした焼夷弾による戦略爆撃ではなかったことから、酒田市街の壊滅的な被害を避けることができた点が「酒田空襲」の特徴であったと考えることができよう。

## （2）空襲体験者の証言と「酒田空襲」

本節では、「酒田空襲」体験者による回想に着目し、空襲当日の状況について整理してみたい。

まず、最初に着目する体験者は、真田慶久氏である。真田氏は空襲当時、陸軍大尉の地位にあり、酒田に駐屯して酒田防空に当たっていた独立高射砲第48大隊第1中隊の中隊長を務めていた人物である。独立高射砲第48大隊は東京において高射第1師団の隷下で編制された部隊であるが、東北地方の防衛に当たるために昭和20年2月に編制された第11方面軍に転出し、仙台に進駐した。昭和20年6月に第1中隊と第4中隊が酒田に進駐したが、第4中隊は港湾と油田地帯防衛のため、さらに土崎へと移動している。真田氏は、空襲当日の状況について、以下のように述べている<sup>4</sup>。

……（前略）さて、十日は、市の要職の人、警察警防関係者並びに勤労動員で協力した人、隣組や女学生達まで八センチメートルの高射砲の実弾射

撃を目前に興味と期待とで続々光ヶ丘陣地周辺に参集して来つつあった。突如警戒警報、続いて空襲警報の発令、大変な実戦になって仕舞った次第で、忽ちくもの子を散らす様に、夫々持場に戻り、或は自宅の防空壕に飛び込む始末になった。当日の空襲は、米機動部隊より発進した艦載機二十機余りが、酒田の港湾鉄道施設等の爆撃を目的に攻撃して来たもので、市にとっても高射砲部隊にとっても初めての経験であった。……（中略）……本来装備大砲はB29の大高度を目標に製造されてあって、小型機の小廻わりに対しては適切な射撃は向きな装備になっていた。然し各六ヶ分隊にそれぞれ小隊長及び先任下士官の分火指揮により、各大砲ごと砲身射撃を実施して、敵機の撃墜に努めた。当初編隊隊形で港湾爆撃を企図していた敵機は、わが高射砲の連続射撃により、散（ママ）を乱し正確な照準による爆撃を行い得ず、目標を外れたものが多かった様である。……（中略）……我が方の戦果は撃破二、三機で、うち一機は東根方面に米操縦士が落下傘降下して住民、憲兵に逮捕され、捕虜虐待問題が一時あった如く聞いている。……（後略）

真田氏は高射砲部隊の指揮官として空襲に際して対空戦闘に当たった当事者といえる。真田氏の回想からは、米艦載機部隊の攻撃目標は「酒田の港湾鉄道施設等の爆撃を目的」としていたと判断していたこと、部隊が装備していた99式8糎高射砲<sup>5</sup>の迎撃により米軍機の「編隊隊形」をとった「正確な照準による爆撃」を阻止することに成功し、米軍機の爆撃は「目標を外れたものが多かった様である」といった迎撃の成果と、「我が方の戦果は撃破二、三機」と、2～3機の米軍機の撃破を戦果として挙げたと判断していたことなどが分かる。

次に、空襲の目標となった港湾地帯で空襲を体験した佐藤甚太郎氏の証言を採り上げる。佐藤（甚）氏は当時、四カ浦漁業会の会長を務めており、漁業会の事務所への出勤途中で空襲に遭遇し、二回にわたる空襲について以下のように述べている<sup>6</sup>。

……（前略）この日の朝、いつものように自転車で出勤しましたが、間もなく警戒警報が鳴りました。職員が外に飛び出して空をながめていました

が、三、四機のグラマン機の機影が現れ、空襲警報となりました。すぐに高射砲が火を噴きました。いまの酒田警察署のあたりに高射砲陣地があったんです。みんなで見ておりました。グラマン機の近くで炸裂はするんですが、全然命中しません。これは一〇分位続きました。そのうちに高射砲の射撃がやみ、これを待っていたかのようにグラマン機が急降下しながら銃爆撃を始めました。

最初狙われたのは四カ浦の今の岸壁です。だいたい船が入っていましたからね。それで、これでは危ないと乗組員たちが船からはい出し、漁業会の建物ーいま県漁連のある所ですーに逃げ込んで来ました。数十人という感じでした。ですからこんどは漁業会が攻撃の目標になりました。それでみんな建物から飛び出し、あっちこっちの防空壕に転がり込みました。私達は漁業会専用の防空壕に逃げました。でも漁船員達も入ってきたので、入り口のフタが出来ない位人であふれました。この間も銃爆撃は続きました。あのグラマン機が、急降下して来る時の頭におおいかぶさってくるような物凄い爆音は、いまもはっきり頭に残っています。……（中略）……やがてグラマン機が引き上げ、あちこちから人の声が聞こえました。川からあがってみると、漁業会の建物は火炎につつまれていました。油が引火したとみえてものすごい火です。当時神奈川県から応援に来ていた消防隊が盛んに放水していましたが、結局建物はほとんど焼けてしまいました。

九死に一生を得た私は、妹の家で休んでおりました。この時二回目の空襲が始まりました。こんどは大きな船が狙われたようです。私は妹の家にいたのでわかりませんでしたが、私の家のある宮海の部落の人達は皆んなで見ていたそうです。船は港の外に避難し、グラマン機がこれを追っかける。銃爆撃を繰り返しますがなかなかあたりません。そのうちに油を積んでいた大きな船がやられました。油が海一面に広がったそうです。この油の中を一人の乗組員が二、三キロも泳いで部落の海岸に半死半生でたどりつきました。私の家で休ませたあと病院に運んだそうです。この時は吹浦付近で海防艦が応戦しましたが、火災が発生し沈没したという話を聞きました。……（後略）



佐藤（甚）氏の回想からは、1回目の攻撃の際には、米軍「グラマン機」の攻撃に対して高射砲陣地が反撃を行い、米軍機の近くで砲弾が炸裂するものの直撃はなかったこと、船舶が多数停泊していた岸壁が米軍機の攻撃目標となったが、船員が船から漁業会の事務所に避難してくると米軍機の攻撃目標が漁業会の事務所となったこと、漁業会の事務所は米軍機の爆撃により炎上したことが、2回目の攻撃では、「油を積んでいた大きな船がやられ」たことと、「吹浦付近で海防艦が応戦しましたが、火災が発生し沈没した」という話を聞いたことなどが明らかとなる。

なお、高射砲の戦闘については、高速で飛行する航空機に砲弾を直撃させるのではなく、至近距離で砲弾を炸裂させて、その爆風や弾片によって航空機に損害を与え、撃墜を図るというのが一般的な対空戦闘となる点に鑑みると、「グラマン機の近くで炸裂はする」という回想の内容から、命中しないことを問題視している佐藤（甚）氏の見解とは異なり、真田氏の見解のとおり、米軍機に対して有効な対空射撃が行われたと判断することができよう。

また、佐藤（甚）氏によれば、高射砲の砲撃は「一〇分位続」いて止んでしまったということである。真田氏によれば、6門の高射砲はそれぞれ300発ずつの砲弾を支給されていたとのことであるが<sup>7</sup>、空襲当日は、高射砲陣地の完成を祝して実弾射撃演習を公開で行う予定であったところに米軍の攻撃を受けてそのまま実戦となったという状況であることから、あくまでも高射砲部隊は実弾射撃演習というデモンストレーションを想定していたと推測される。となると、弾薬の誘爆事故などを避けるために、全弾薬を砲側に用意するのではなく、演習に必要な程度の弾薬のみを準備していた可能性が高い。高射砲は、高速で移動する航空機との戦闘を主とするため、1分当たり10～15発の射撃が可能である場合が多い。これらより、高射砲による応戦が10分程度で沈黙したのは、手持ちの弾薬を撃ち尽くしてしまった可能性を考えることができよう。

最後に採り上げるのは、日和山近傍の蓮尚寺住職夫人である佐藤秀子氏である。蓮尚寺住職の佐藤教祐氏は、「酒田空襲」の際に不発弾の直撃を受けて亡くなっており、例えば、空襲当時、酒田警察署の司法主任であった橋本今朝雄氏の回想でも、「……（前略）帰りに下台町の蓮尚寺の住職である佐藤教祐（三八）が、五七キロの不発爆弾が日和山の方から寺の境内にころがり落ち、その

下敷となって圧死したのを検死したが、思わぬ災難で気の毒であった」と述べられている<sup>8</sup>。佐藤（秀）氏の回想は、夫の教祐氏が亡くなった際の様子などについて言及されている<sup>9</sup>。

……（前略）この日、朝から警戒警報が鳴っていましたが、そのうちにグラマン機がたくさん飛んできました。私は一歳にもならない子供をおおい、ねんねこに防空ズキン姿で夫と一緒に日和山に逃げました。お堂の脇に自家用の防空壕があったんですが、逃げまどう付近の子供達を先に隠したため、私達は入り切れなくなりました。雑木林の中で頭からふとんをかぶりグラマン機がいなくなるのを待ちました。公園の高射砲陣地の方から高射砲の音が聞こえました。グラマン機が何回となく大きな音をたてて頭の上を飛んで行きました、

しばらくして、突然バサバサッと鷹でも舞い降りるような音がしました。木の枝がバリバリッと折れる音もしました。足の方が何んか重くなったような感じがしました。やがてグラマン機が遠のいたので夫の方を振り向きました。腹ばいになっていたはずの夫が仰向けになっていました。声をかけましたが返事がありません。揺すっても動きません。そのはずです。夫は死んでいたのです……。目を大きく開いたままでした。そして足元に大きな不発弾が不気味に転がっていました。……（中略）……不発弾は十数人の人達で沖に捨てました。あとから聞いた話ですが、不発弾は長さ一メートル、直径六〇センチ、重さ五十七キロもあったそうです。これが空から夫を直撃したんですからひとたまりもありません。また、この時の振動で寺の畳が全部はがれ、床板の節も吹っ飛んでいました。爆発していたらこの辺一帯は駄目だったろうと言われました。……（後略）

佐藤（秀）氏の回想から、橋本氏の回想とは異なり、寺の境内の防空壕に逃げ惑う子供たちを避難させ、実は、佐藤夫妻は日和山に逃げ込んで米軍機が去るまで身を潜めていたということが明らかとなる。そして、その際に不幸にして夫の教祐氏が不発弾の直撃を受けて亡くなったこと、また、その不発弾が「長さ一メートル、直径六〇センチ、重さ五十七キロ」の形状であったことなどが

明らかとなる。

「酒田空襲」を体験した真田・佐藤（甚）・佐藤（秀）の各氏の回想から、空襲当時の状況について、①米艦載機部隊（「グラマン機」）の攻撃目標は酒田の港湾・鉄道施設と判断されたこと、②米軍機の攻撃に対する高射砲部隊の反撃は至近弾を与え、米軍機の編隊爆撃による正確な照準を阻止したこと、③港湾地帯では、最初、岸壁に停泊していた船舶が攻撃目標とされたが、船員が漁業会の事務所に避難してからは漁業会の事務所が攻撃目標とされたこと、④2回目の空襲でタンカーが炎上したこと、⑤米軍機との交戦の結果、2～3機の米軍機を撃破したが、吹浦沖で日本海軍の海防艦が炎上沈没したこと、⑤投下された爆弾は、「長さ一メートル、直径六〇センチ、重さ五十七キロ」の形状であったことなどを整理することができよう。ただし、空襲当時は非常に混乱した状況であったことは想像に難くないため、かかる回想の内容が事実であるかどうかについては、改めて検討を加えることとしたい。

### （３）空襲当時の酒田における防空体制

前節においてみたように、「酒田空襲」に際して陸軍の独立高射砲第48大隊第1中隊が米軍機に対して反撃を行っているが、「酒田空襲」の際に、酒田に駐屯していた陸海軍部隊について検討を加えてみたい。

まず、『山形県警察史』に示されている「酒田空襲」当時に酒田市に駐屯していた陸海軍部隊の一覧は、表1のとおりとなる<sup>10</sup>。

（表1）『山形県警察史』に基づく酒田市駐屯部隊一覧

部隊名
東北第3398部隊
進第5226部隊（高射砲隊）
暁16709部隊
暁6196部隊
暁部隊小野隊
酒田揚塔司令部
酒田憲兵分遣隊

酒田停車場司令
東北第3399部隊
新潟海軍勤武官府酒田出張所
陸軍輸送統制部酒田出張所
舞鶴海軍軍需部酒田出張所
舞鶴海軍運輸部酒田出張所
陸軍燃料本部酒田出張所
最上隊
大内隊
一枝支廠酒田出張所
陸軍糧秣廠酒田出張所
海軍水路部測量隊
新潟港湾警備隊鵜川隊

また、前節において回想を採り上げた高射砲部隊の指揮官である真田慶久氏の回想に基づく酒田市の駐屯部隊の一覧は表2のとおりとなる<sup>11</sup>。

(表2) 真田慶久「終戦時の酒田」に基づく酒田市駐屯部隊一覧

部隊名
暁第6168部隊長・安田少佐以下、渡辺隊・山田隊・小野隊（揚塔）
東北第3398部隊長・高橋少佐（防備）
酒田憲兵分遣隊長・亀山憲兵大尉（保安）
独高第48大隊第1中隊・真田大尉（防空）
仙台陸軍軍需品支廠長・別井准尉（補給）
仙台陸軍糧秣支廠長・三浦少尉（補給）
仙台陸軍兵器補給廠長・深井中尉（補給）
酒田停車場司会部長・菊地中尉（輸送）
山形歩兵聯隊機関銃隊長・荒木見習士官（防空）
吹浦電波探知機隊長・某少尉（防空）
陸軍燃料廠酒田支所長・某少尉（補給）
新潟港湾警備隊酒田派遣隊長・鵜川海軍少尉（防空）
第40号海防艦長・青木海軍少佐（停泊）
海軍糧秣廠酒田支所長・某海軍少尉
第一海軍技術廠酒田支所長・土井海軍大尉（特改（ママ、攻力？）兵器）
その他不明（補給）

なお、陸軍の各部隊に関しては、太平洋戦争に突入する昭和16年より、防諜上の理由から、師団や独立混成旅団などのように独立して作戦を遂行する能力のある部隊に対して兵团文字符と呼ばれる漢字1文字もしくは2文字からなる固有の符号を付し、その上で、隷下の各部隊については3桁から5桁の固有の数字を通称番号として付すことで、兵团文字符と通称番号を組み合わせで部隊を示すこととした。例えば、表1における「東北第3398部隊」という表記は、「東北」が兵团文字符であり、「3398」が通称番号となるということである。兵团文字符は所属する上級部隊によって変更されるが、通称番号は各部隊に固有の数字となるため、他方面に転出して異なる上級部隊の隷下に入った場合も変わらないという特徴がある。このため、表1及び表2において兵团文字符と通称番号の組み合わせで示されている各部隊について、復員庁留守業務局が作成した『課別部隊通称番号一覧表（全軍のもの） 昭和22年8月1日』に基づいて、どのような部隊であるかを表3に示した<sup>12</sup>。なお、（表3）のうち、『山形県警察史』が「進第5226部隊（高射砲隊）」として記載している部隊について、「独立高射砲第48大隊」に与えられた兵团文字符及び通称番号は「鎬1064」であり、通称番号「5226」は特別警備隊第326中隊（林5226）に与えられていることから、誤記が生じたものと推察される。また、同様に、表1において「一枝支廠酒田出張所」とされている部隊は、表2における「第一海軍技術廠酒田支所」の略称である「一技支廠」を誤記したものと推察される。

（表3）兵团文字符・通称番号表記部隊の名称一覧

兵团文字符・通称番号表記	部隊名称
東北第3398部隊	山形地区第15特別警備隊
東北第3399部隊	山形地区第16特別警備隊
進第5226部隊	鎬1064？ 独立高射砲第48大隊※
暁第6168部隊	陸軍船舶部隊 第1船舶輸送司令部
暁6196部隊	陸軍船舶部隊 第9野戦船舶廠
暁16709部隊	陸軍船舶部隊 船舶工兵第9連隊補充隊

※ 5226 は特別警備隊第 326 中隊の通称番号のため、誤記と考えられる。

「酒田空襲」当時、酒田市に駐屯していた部隊のうち、対空戦闘を任務としていた部隊は、表2において示したように、真田氏が各部隊の任務をカッコ内に付記していることから、「独高（「独立高射砲」の省略表記一筆者註）第48大隊第1中隊」と「山形歩兵聯隊機関銃隊」、「吹浦電波探知機隊」、「新潟港湾警備隊酒田派遣隊」の4部隊であったことが分かる。これらの部隊のうち、「独立高射砲第48大隊」は、前節において示したように99式8糎高射砲を装備した陸軍部隊である。「山形歩兵聯隊機関銃隊」については、陸軍歩兵連隊の中の機関銃中隊を指していると推測されるため、92式重機関銃を装備した部隊であると考えられる。「吹浦電波探知機隊」については、海軍の索敵部隊であり電波探知機（レーダー）によって飛来する航空機を探知することが任務であるため、真田氏は「防空」に分類しているが、戦闘能力は有していないとみるべきであろう。「新潟港湾警備隊酒田派遣隊」は海軍が重要港湾の防衛のために設置した港湾警備隊のうち、酒田港防空のために新潟港湾警備隊から派遣された分遣隊であると推測される。「新潟港湾警備隊酒田派遣隊」の装備については、『山形県警察史』及び真田氏の回想のいずれにも記載がないため、東北地域において設置されていた港湾警備隊のうち、「青森港湾警備隊」の装備を参考とする。「青森港湾警備隊」は、終戦時に、「二十五糎二連装機銃」を「三」、「十三糎単装機銃」を「六」、「七・七糎軽機銃」を「三」ずつ保有していたことから<sup>13</sup>、酒田派遣隊も「二十五糎二連装機銃（96式25糎機銃と推定一筆者註）」や「十三糎単装機銃（93式13糎機銃と推定一筆者註）」、「七・七糎軽機銃（92式7糎機銃と推定一筆者註）」などを装備していたことが推測される。大規模な港湾の警備に当たる場合は、高射砲（海軍は高角砲と呼ぶことが多い一筆者註）などの他にも、上陸した敵部隊との戦闘を想定するためか、迫撃砲や擲弾筒なども装備しているが<sup>14</sup>、酒田の場合は新潟港湾警備隊の分遣隊であることから、高射砲などは装備せず、上述のとおり、対空機銃を中心とした装備であったと考えるべきであろう。

「酒田空襲」当時、酒田市で対空戦闘を行っていた部隊は、「独立高射砲第48大隊（第1中隊一筆者註）」と「山形歩兵聯隊機関銃隊」、「新潟港湾警備隊酒田派遣隊」の3つの部隊であったと考えられる。

## 2 米軍の記録に見る「酒田空襲」

### （1）米軍部隊の概要

「酒田空襲」を行った米機動部隊は、第38任務部隊（Task Force 38）である。同部隊は、昭和18年8月に初めて編制され、ブーゲンビル島の攻撃に加わったが、その後、規模を拡大しつつ、南太平洋における島嶼の戦闘に参加し、日本海軍の根拠地であったトラックやパラオの空襲を行っている。さらに、昭和19年6月にはマリアナ諸島攻撃に参加して、日本海軍の機動部隊とマリアナ沖海戦を戦い、同年10月末以降は、フィリピン攻撃に参加してレイテ沖海戦で日本海軍に大打撃を与えたのち、台湾沖航空戦を戦い、昭和20年には沖縄攻撃に参加している。昭和20年6月に沖縄における日本軍の組織的戦闘が終結すると、南西諸島から北上して本州に対する攻撃を開始している。「酒田空襲」は、第38任務部隊による本州攻撃作戦の一環として、昭和20年8月10日に行われた。本州に対する攻撃作戦中の第38任務部隊の司令官は、ジョン・S・マケイン中將であった。

太平洋戦争後半における米海軍は、太平洋戦線を統括する最上級部隊として太平洋艦隊を設置しており、チェスター・ニミッツ元帥を司令長官としていた。太平洋艦隊の下には南太平洋を主要な作戦海域とする第3艦隊と、中部太平洋を主要な作戦海域とする第5艦隊が所属しており、第3艦隊はウィリアム・ハルゼー大將が、第5艦隊はレイモンド・スプルーアンス大將がそれぞれ司令長官を務めた。この他にも、太平洋戦線にはトーマス・C・キンケイド中將が司令長官を務める第7艦隊が配備されていたが、第7艦隊は海軍部隊ではあるものの陸軍のダグラス・マッカーサー元帥の指揮下に置かれていたため、海軍の太平洋艦隊とは指揮系統を異にしていた。

なお、第38任務部隊は、エセックス級正規空母3隻とインディペンデンス級軽空母2隻を主幹とする3つの任務群（Task Group）を中心に構成されており、運用する航空戦力は1000機を超える規模であった。

「酒田空襲」が行われた昭和20年8月頃の第38任務部隊の編制は、以下のとおりとなる<sup>15</sup>。



まず、トーマス・L・スプレイグ少将が指揮する38.1任務群（Task Group 38.1）に、正規空母「ベニントン」・「レキシントン（Ⅱ）」・「ハンコック」、軽空母「ペローウッド」・「サンジャシント」のほか、戦艦3隻、軽巡洋艦5隻、駆逐艦21隻が配されていた。38.2任務群は軽巡洋艦1隻のみが配属されており、事実上の欠番となっている。38.3任務群はジェラルド・F・ボーガン少将が指揮を執り、正規空母「タイコンデロガ」・「エセックス」・「ランドルフ」、軽空母「モントレー」・「バターン」と、戦艦2隻、軽巡洋艦5隻、駆逐艦25隻が配されていた。38.3任務群は、アーサー・W・ラドフォード少将が指揮を執り、正規空母「シャングリラ」・「ヨークタウン（Ⅱ）」・「ボノムリシャル」、軽空母「カウペンス」と、戦艦3隻、重巡洋艦3隻、軽巡洋艦1隻、駆逐艦13隻が配されていた。38.4任務群は、英国艦隊から第38任務部隊に編入されており、英国海軍のバーナード・ローリングス中将の指揮下に、正規空母「インディファティガブル」のほかに戦艦1隻、軽巡洋艦2隻、駆逐艦8隻が配されていた。かかる第38任務部隊のうち、「酒田空襲」を行ったのは、38.1任務群の「ベニントン」及び「レキシントン（Ⅱ）」の艦載機であった。

## （2）米航空隊の戦闘記録

本節では、「酒田空襲」を行った米海軍艦載機部隊によって作成された戦闘報告書について採り上げ、その内容について確認を行う。

当該報告書は所定の書式にタイプ打ちで作成されており、記載項目は、「I. GENERAL」、「II. OWN AIRCRAFT OFFICIALLY COVERED BY THIS REPORT」、「III. OTHER U.S. OR ALLIED AIRCRAFT EMPLOYED IN THIS OPERATION」、「IV. ENEMY AIRCRAFT OBSERVED OR ENGAGED」、「V. ENEMY AIRCRAFT DESTROYED OR DAMAGED IN AIR」、「VI. LOSS OR DAMAGE, COMBAT OR OPERATIONAL, OF OWN AIRCRAFT」、「VII. PERSONNEL CASUALTIES」、「VIII. RANGE, FUEL, AND AMMUNITION DATA FOR PLANES RETURNING」、「IX. ENEMY ANTI-AIRCRAFT ENCOUNTERED」、「X. COMPARATIVE PERFORMANCE, OWN AND ENEMY AIRCRAFT」、「XI. ATTACK ON



ENEMY SHIPS OR GROUND OBJECTIVES]、「XII. TACTICAL AND OPERATIONAL DATA」の12項目となっている。なお、第9項目については、対空砲の口径に応じて、時限式信管を装備した75ミリ以上の「HEAVY」、着発式信管を装備した20～50ミリの「MEDIUM」、6.5～13.2ミリの機銃である「LIGHT」の3種類に分類され、それぞれについて「NONE」・「MEAGER」・「MODERATE」・「INTENSE」のチェックボックスにチェックを入れる書式となっており、第12項目は自由記述となっている。

なお、各部隊の報告書における船舶に対する表記について、米海軍が使用していた日本の艦船の識別資料である「Photographic intelligence center report No. 6, May 1945, Japanese shipping. Report No. 14-f (14) , USSBS Index Section 6」に基づいて略述する<sup>16</sup>。米海軍は日本の商船を「Transports (客船)」、「Freighter Transports (貨客船)」、「Freighters (貨物船)」、「Stack AFT (煙突が後部にある船舶、主としてタンカーを指す)」の船種に大きく分類し、各船種において、マストやハッチの数やその形状、船楼の形状、救命ボートの搭載数などの船舶の特徴に応じて分類し、さらに分類細目が設定されている場合は、細目に従って分類を行っていた。このため、例えば、「SAS」と表記されている船舶は、「Stack Aft」の中の分類項目「A」、分類細目「S」に当たる船舶を指す。さらに、その表記についてはフォネティックコードを用いて、「A」を「able」、「B」を「baker」、「C」を「charlie」、「D」を「dog」、「F」を「fox」、「T」を「tare」、「S」を「sugar」と表記している場合がある。

### 1) 第1戦闘爆撃航空隊<sup>17</sup>

第1戦闘爆撃航空隊 (VBF-1) は、「ベニントン」の艦載機であり、F4U「コルセア」戦闘機8機で編制されている<sup>18</sup>。同部隊の戦闘報告書によれば、任務は「Attack Airfields or Shipping Central Honshu (本州中央部の飛行場もしくは停泊船舶攻撃)」であり、8月10日の午前7時に出撃、9時10分から10時5分にかけて攻撃を実施し、11時45分に帰投している。

出撃時の兵装は「1×500 G.P. AN-M64 A1」及び「4×5" HVAR MK 4-0」であり、これはそれぞれ500ポンド通常爆弾 (AN-M64 A1) 1発と、マーク4通常弾頭 (MK 4-0) を装着した5インチ高速ロケット弾 (High Velocity Aircraft

Rocket) 4発を装備していることを表している。

また、日本軍との戦闘に関しては、航空機との戦闘については「NONE」、対空砲との戦闘については、「HEAVY」について「MODERATE」、「MEDIUM」について「NONE」、「LIGHT」について「MEAGER」との報告となっており、航空機との戦闘や航空機に対する攻撃はなく、対空砲火としては独立高射砲第48中隊による迎撃が中規模に行われていたと判断されている。

次に、第1戦闘爆撃航空隊による攻撃結果であるが、酒田港に停泊していた4隻の船舶に対する攻撃を報告している。「FTC in Sakata Harbor」に対してロケット弾11発、500ポンド爆弾8発による攻撃を行い、ロケット弾1発を命中させ、「Damaged」との判定を行ったほか、「SAS off Harbor Entrance」に対してロケット弾8発と.50口径(12.7ミリ―筆者註)機銃800発を発射、「SAS in Sakata Harbor」に対してロケット弾10発を発射、「SD's in Sakata Harbor」に対してロケット弾10発を発射したが、それぞれに命中弾なし、との判定を行っている。なお、機銃掃射を行った酒田港口の中型タンカーについては、「ベニントン」艦載機の第1雷撃航空隊(VT-1)の攻撃によって沈没したと判定している。

第1戦闘爆撃航空隊の自由記述欄における日本上空での作戦行動などに関する記述を抜粋する。まず、出撃時の作戦目標に関する説明については、「A short time before the planes were launched, the pilots were instructed to investigate and attack secondary airfields at Obanzawa and Mamurogawa in the central part of Honshu west coast of Sendai and a reported airfield at Tsuruoka on the west coast of Japan.」とあり、尾花沢、真室川、鶴岡の各飛行場の偵察と攻撃を出撃前の短時間で指示されている。その後、日本上空に到達後の状況として、「Commander Harden lead (ママ) the flight over central Honshu where a solid cover of clouds prevented a reconnaissance (ママ) of the two airfields and continued on to the west coast. No suitable targets could be found at the reported location of the Tsuruoka airfield so an attack was made on one SAS, two FTC's and 6 SD's discovered in the harbor at Sakata.」とあり、尾花沢と真室川の上空が雲で覆われて偵察が不可能であったため鶴岡に向かったが、適切な攻撃目標がないと判断して酒田港に向かい、中型タンカー1隻、中型貨客船2隻、機帆船6隻を発見して、これらに対する攻撃を決断してい

る。その攻撃については、「Three attacks were made on the ships. The Corsairs damaged one FTC with a direct rocket hit and several of the other ships by strafing. The two sunk, a SAS and a SD, were hit by bombs of the TBM's of VT-1 after being heavily strafed by VBF-1.」とあり、3回にわたって反復攻撃を行い、中型貨客船1隻にロケット弾を直撃させて損害を与え、数隻に対して機銃掃射を行い、同時に攻撃中であった第1雷撃航空隊の爆撃で中型タンカー1隻と機帆船1隻の合計2隻を撃沈したとしている。なお、日本軍の対空戦闘については、「Anti-aircraft fire was received from a heavy caliber battery located at the south edge of Sakata City. The fire was continously (ママ) pointed, bursting at 6,000 feet, and accurate.」とあり、酒田市南端から大口径の高射砲による射撃を受け、継続して高度6000フィート（約1800メートル―筆者註）で砲弾が炸裂し、正確な射撃であったことが述べられている。

## 2) 第1雷撃航空隊<sup>19</sup>

第1雷撃航空隊（VT-1）は「ベニントン」の艦載機であり、TBF「アヴェンジャー」雷撃機12機で編制されているが、その内訳は、主翼にもハードポイントを追加して爆弾等を搭載できるように改良したTBM-3が2機と、さらに電子戦装備を搭載したTBM-3Eが10機となっている<sup>20</sup>。

第1雷撃航空隊の任務は「Miscellaneous shipping at Sakata（酒田港停泊諸船舶 [への攻撃]）」であり、8月10日の午前7時45分に出撃、9時20分に攻撃を開始、12時に帰投している。

出撃時の兵装については、4発の500ポンド通常爆弾を搭載したが、1機のTBM-3Eのみ3発搭載であった。

次に、日本軍との戦闘であるが、航空機との戦闘については「NONE」、対空砲との戦闘については、「HEAVY」について「NONE」、「MEDIUM」について「MEAGER」、「LIGHT」について「NONE」との報告をしている。第1雷撃航空隊は、対空砲火による迎撃をほとんど受けていないと判定したようである。

続いて、第1雷撃航空隊による攻撃結果であるが、「SAS」に対して500ポンド爆弾7発を投下して2発を命中させ、「Sunk」との判定を行ったほか、「FTB」に対して500ポンド爆弾10発を投下して1発を命中させて「Serious」、「SD's」

に対して500ポンド爆弾14発を投下して3発を命中させ、「1 sunk, damage to others」との判定であった。

船舶以外への攻撃結果としては、「Warehouse adjacent to docks」に対して500ポンド爆弾6発を投下して2発を命中させ「Serious」、「Factoris (ママ) adjacent to docks」に対して500ポンド爆弾4発を投下して2発を命中させ「Serious」など、港湾地帯における倉庫や工場に対しても大打撃を与えたと判定している。

最後に、第1雷撃航空隊の自由記述欄より、「酒田空襲」に関する記述を抜粋する。出撃に当たっては、「Primary targets for this strike were aircraft and airfield installations at Mamurogawa and Obanasawa, Tauroka (ママ), and shipping at Sakata.」と、優先目標として真室川、尾花沢、鶴岡の飛行場と航空機が挙げられ、加えて酒田港の停泊船舶も優先目標となっていたことが分かる。しかし、「Weather at the airfields was unfavorable for bombing attacks so the formation let down on the western coast of Honshu and proceeded to Sakata.」とあるように、天候不良により真室川や尾花沢の飛行場への攻撃が困難となったため、酒田への攻撃を実施している。酒田港の停泊船舶に対する攻撃は、「Two attacks were made on shipping in this port by this squadron.」とあるように、2回にわたって行われ、前述のような戦果を挙げたと判定している。一方で、日本軍の反撃については、「Flak was moderate but quite accurate. It is estimated that a battery of four automatic weapons fired bursts of predicted concentration.」としており<sup>21</sup>、4基の対空機銃によるきわめて正確な攻撃を受けたことが述べられている。もっとも、第1雷撃航空隊には損害はなく、「Six unexpended bombs were jettisoned over Orakawa (ママ).」とあるように、女川近郊で未使用の爆弾6発を投棄した後に母艦「ベニントン」に帰投している。

### 3) 第94戦闘航空隊 (第1次)<sup>22</sup>

第94戦闘航空隊 (VF-94) は「レキシントン (II)」の艦載機であり、F6F「ヘルキャット」戦闘機8機で編制されている。第94戦闘航空隊の任務は「Strike vs. Tsuruoka Airfield, Honshu (鶴岡飛行場への攻撃)」であり、8月10日の午

前7時に出撃、10時に攻撃を開始、11時45分に帰投している。出撃時の兵装については、1発の500ポンド通常爆弾と6発の5インチ高速ロケット弾を搭載した。

日本軍との戦闘に関して、航空機との戦闘については「NONE」、対空砲との戦闘については、「HEAVY」について「MODERATE」、「MEDIUM」と「LIGHT」について「NONE」との報告をしている。

第94戦闘航空隊による攻撃結果としては、「FTB (2) at Dock – Sakata」に対して500ポンド爆弾3発とロケット弾24発を発射してロケット弾7発を命中させ、「Slight Damage to each ship」と判定している。他には、「Bridge at Sakata」に対して500ポンド爆弾4発とロケット弾24発を発射して、500ポンド爆弾1発を命中させ、「Serious damage」と判定し、「Warehouse dock area – Sakata」に対して500ポンド爆弾1発を投下して命中させ、「Probably Destroyed」と判定している。

第94戦闘航空隊の自由記述欄における「酒田空襲」に関する記述については、まず、「These two VF four plane divisions escorted ten VT-94 to target which was Tsuruoka airfield on the West Coast of Japan.」とあり、第94戦闘航空隊は、4機ずつ2つの小隊に分かれて第94雷撃航空隊（VT-94）を護衛して鶴岡飛行場を目指して出撃した。しかし、「The assigned target appeared to be an abandoned training base with no aircraft present. Seeking a target of opportunity, the town of Sakata ten miles to the North along the coast had been singledout (ママ) by the BENNINGTON group from which the target coordinator had been assigned.」とあるように、鶴岡飛行場はすでに放棄された練習飛行場であり、日本軍機も存在していなかったため、「ベニンントン」の航空隊指揮官の指示によって酒田を攻撃目標に変更したことが述べられている。第94戦闘航空隊は、「One VF division attacked the ships with VT close behind while the second VF division dropped on the bridge.」とあるように、1つの小隊が雷撃機と共同して酒田港の船舶を、もう1つの小隊が橋梁に対して攻撃を加えた。その結果については、上述のとおり、橋梁に対しては大打撃を与えたと判定しているが、船舶への攻撃については、2隻の大型貨客船に対して、いずれも軽微な損害を与えるに留まったと判定している。

#### 4) 第94雷撃航空隊<sup>23</sup>

第94雷撃航空隊（VT-94）は「レキシントン（Ⅱ）」の艦載機であり、TBF「アヴェンジャー」雷撃機9機で編制されている<sup>24</sup>。なお、発艦直後に1機がエンジントラブルによって墜落し、「レキシントン（Ⅱ）」に随伴していた駆逐艦「ジョン・ロジャース」によって乗員全員が救助されているため、「酒田空襲」に加わったのは8機となる。第94雷撃航空隊の任務は、「Attack aircraft – Tsuruoka Airfield（鶴岡飛行場の航空機攻撃）」であり、8月10日の午前7時に出撃、9時15分から10時5分にかけて攻撃を行い、12時に帰投している。出撃時の兵装は、4発の500ポンド通常爆弾を搭載していた。

日本軍との戦闘に関する報告として、航空機との戦闘については「NONE」、対空砲との戦闘については、「HEAVY」について「NONE」、「MEDIUM」と「LIGHT」について「MEAGER」との報告をしている。

第94雷撃航空隊の攻撃結果については、まず、「Runway Tsuruoka Airfield」に対して500ポンド爆弾5発を投下して全弾を命中させ<sup>25</sup>、与えた損害は「Slight」と判定している。次に、「Dock Area Sakata」において500ポンド爆弾14発を投下して6発を命中させ、「Sank 1 Sugar Dog, Damaged three」及び「Set two Warehouse afire」と、船舶と倉庫の双方に損害を与えたと判定している。最後に、「Railyard Sakata」に対して500ポンド爆弾13発を投下して6発を命中させ、「Destroyed roundhouse」、「Exploded locomotive」、「Destroyed several freight cars」、「set gasoline fire in freight yard」、「strafed box cars」と、鉄道施設と機関車・貨車を破壊したと判定し、客車数両に対して機銃掃射を加えたとしている。

第94雷撃航空隊の自由記述欄における「酒田空襲」に関する記述は以下のとおりである。まず、「9 VT and 8 VF launched to strike grounded aircraft at Tsuruoka airfield on the west coast of northern Honshu. No information was available on the type of field or on the possibility of finding aircraft on the ground」とあり、第94戦闘航空隊の報告書にもあったように、第94雷撃航空隊は第94戦闘航空隊の護衛を受けて鶴岡飛行場の攻撃に向かったが、出撃前に鶴岡飛行場や同飛行場の日本軍機に関する情報などについては全く知らされていなかった。なお、鶴岡に到達した第94雷撃航空隊は、「Found two old landing

strips, very much in disuse. Made one attack run there, five planes releasing bombs. No planes found on the field.」とあり、すでに使用されていないように見える古い滑走路を2本発見し、1回の攻撃を行ったが、日本軍機は発見できなかったようである。その後、「Went to Sakata, twenty miles north of field and attacked targets of opportunity. All attack runs made with shallow glides, relatively low speeds. Little opposition.」とあるように、酒田に向かって適宜目標を攻撃したが、日本軍の反撃は非常に微弱であったとしている。

### 5) 第94戦闘航空隊 (第2次)<sup>26)</sup>

第94戦闘航空隊は、先発の部隊と後発の部隊がそれぞれ出撃しており、後発の部隊が「酒田空襲」における「2回目」の空襲を行っている。後発の部隊の編制はF6F「ヘルキャット」戦闘機11機であり、搭載した兵装については先発の部隊と同様に1発の500ポンド通常爆弾と6発の5インチ高速ロケット弾である。

後発の第94戦闘航空隊の作戦任務は先発部隊と同様に「Strike vs. Tsuruoka Airfield, Honshu (鶴岡飛行場への攻撃)」であり、8月10日の午前9時30分に出撃し、11時30分に攻撃を開始、14時に帰投している。後発部隊による日本軍との交戦であるが、第94雷撃航空隊と同様に、航空機との戦闘については「NONE」、対空砲との戦闘については、「HEAVY」について「NONE」、「MEDIUM」と「LIGHT」について「MEAGER」との報告をしている。ただし、後発の第94戦闘航空隊は、「F6F-5, 20mm AA gun, underside fuselage aft of cockpit: Damaged elevator tab control wire (コクピット後方の胴体下部に被弾し、昇降舵調整タブの操作索に被害—筆者註)」と「F6F-5, 20mm AA gun, port wing underside inboard of wing tip (左翼下部の翼端内側に被弾—筆者註)」といった対空砲による被弾の報告があり、2機のF6Fが20ミリ機銃弾による損害を報告している<sup>27)</sup>。

後発の第94戦闘航空隊による攻撃結果であるが、この部隊は酒田を空襲する前に秋田県本荘町で郊外の倉庫を爆撃しており、また、酒田を空襲した帰途に岩手県後藤野で陸軍の飛行場を攻撃し、機銃掃射によって航空機2機を撃破・炎上させたと報告している。ただ、本稿では「酒田空襲」に関する攻撃結果を採り上げることとする。酒田においては、まず、「Fox Tare Baker at anchor-



Sakata」に対して500ポンド爆弾4発とロケット弾24発、.50口径機銃3000発による攻撃を加え、500ポンド爆弾1発が至近弾となり、ロケット弾4発と機銃弾2000発を命中させ、「Slight damage」との判定を行っている。さらに、「Fox Tare Dog Underway at Sakata」に対してロケット弾30発と.50口径機銃4000発を発射し、ロケット弾6発と機銃弾2500発を命中させ、「Sunk」との判定を行っている。この他には、「Bridge Sakata」に対してロケット弾12発を発射して2発を命中させ、「Slight Dmg.」、「Dock Area Sakata」に対して、500ポンド爆弾2発と.50口径機銃2000発を発射してこれを全弾命中させ、「Warehouse Serious Dmg.」と判定している。

後発の第94戦闘航空隊の自由記述欄における「酒田空襲」に関する記述について見る。部隊の出撃に当たっては、「This fighter sweep, which had for its target Tsuruoka airfield were unable to reach the area because of weather and attacked targets of opportunity.」とあるように、鶴岡の飛行場が攻撃目標であったが、天候不良によって鶴岡飛行場への攻撃が不可能であったため、目標の変更を行ったとしている。その結果として、「Hence, the flight sought out shipping at Sakata harbor.」とあるように、酒田港の停泊船舶に対する攻撃を行い、上述のとおり戦果を挙げたとしている。

### 3 「酒田空襲」に関する考察

#### (1) 「酒田空襲」と米軍の作戦目的

昭和20年8月10日の「酒田空襲」については、終戦間近の時期に行われた大規模な空襲であったこともあるためか、米軍の意図について酒田市の人々によってさまざまな憶測が為された。その一例と考えられるのが、戦後に庄内地域で刊行された日刊紙である『日刊庄内』の社説である。空襲から10年を迎えた昭和30年8月10日に、『日刊庄内』の社説は以下のように述べている<sup>28</sup>。

……（前略）今でもあの日のことを疑問に思うのは、あの日の敵機は酒田爆撃が目的で飛来したのであろうか。それとも素通りする積りだったので



あろうかという点である。それは今さらどうでもよいことだが、どうもその点が疑問でならない。丁度あの日何の役にも立たなかった高射砲ができて試射する日だったのである。それが爆撃を受ける最大の原因になったのではなからうかという点である。(後略) ……

つまり、米軍が「酒田空襲」を行ったのは、独立高射砲第48大隊第1中隊の陣地が完成して試射を行う予定があったため、本来は攻撃目標ではなかった酒田が偶発的に目標とされたのではないか、という疑念である。

これについて、第2章第2節で採り上げた米艦載機部隊の報告書から検討を加えてみたい。まず、第94戦闘航空隊のうち、先発した部隊の報告書では、同時に作戦に出撃した航空部隊として、「VBF-1 (「ベニントン」 艦載機。第1戦闘爆撃航空隊—筆者註)」、「VB-1 (「ベニントン」 艦載機。第1爆撃航空隊。SB2C「ヘルダイバー」爆撃機8機で編制。塩釜を空襲し「酒田空襲」には参加していないため、本稿では採り上げていない—筆者註)」、「VT-1 (「ベニントン」 艦載機。第1雷撃航空隊—筆者註)」、「VT-94 (「レキシントン (II)」 艦載機。第94雷撃航空隊—筆者註)」を挙げている。また、第94雷撃航空隊は、同時に出撃した航空部隊として、「VF-94 (第94戦闘航空隊)」のほかに、「AG-31 (正しくは「AG-49」となる。「サンジャシント」 艦載機部隊—筆者註)<sup>29</sup>と「AG-1 (「ベニントン」 艦載機のVBF-1とVT-1の連合部隊—筆者註)」、「Other units of Task Force 38 (その他の第38任務部隊艦載機)」を挙げている。つまり、「酒田空襲」を行った米航空部隊は、「酒田空襲」に参加していない他の部隊も含む東北一帯に対して行われた大規模な作戦の一環として出撃している。さらに、「酒田空襲」を行った各部隊の作戦目標としては、真室川や尾花沢、鶴岡の各飛行場と、その航空部隊に対する攻撃が優先目標とされていたことは前章において見たとおりである。ただし、酒田への攻撃が偶発的なものであったのかという点については、飛行場及び航空機と並ぶ攻撃目標として酒田港の船舶が挙げられていたことから、酒田は米艦載機部隊にとって優先順位の高い攻撃目標であり、「酒田空襲」は決して偶発的に行われたものではなかったと判断することができよう。

そもそも、第94雷撃航空隊の報告書に「No information was available on the

type of field or on the possibility of finding aircraft on the ground」とあるように、優先攻撃目標であるはずの飛行場や航空機についての情報すらも不明の状況で、米軍が独立高射砲第48大隊の存在を把握していた可能性は低く、酒田の高射砲部隊に対する攻撃を企図していた可能性はほぼなかったと考えることができる。

なお、第38任務部隊は8月9日と10日の両日にわたって東北全域に対する大規模な攻撃を実施しているが、その目的について若干の説明を加えたい。

昭和19年7月にサイパンが陥落し、マリアナ諸島を基地としてB29による日本本土に対する本格的な戦略爆撃が開始されると、陸軍は空挺部隊によるサイパンの航空基地への強襲攻撃を計画し、空挺隊員に対する特殊戦闘訓練など、作戦準備に着手した。しかし、昭和20年に入り、硫黄島が陥落するなど戦況がさらに悪化し、サイパンへの強襲攻撃が困難となったことや、同年4月に米軍が沖縄に上陸したことを受けて、米軍占領下の沖縄の飛行場に対する攻撃に目標を変更した。「義烈空挺隊」と命名された陸軍空挺特殊部隊は、5月24日深夜に沖縄の読谷飛行場を強襲し、10名ほどの隊員による攻撃であったにもかかわらず多数の航空機を破壊するとともに一時的に飛行場を使用不能とすることに成功した。

「義烈空挺隊」の戦果を見て、海軍も陸戦隊の精鋭部隊に特殊訓練を行い、空挺特殊部隊によるサイパンに対する強襲攻撃を計画した。海軍の作戦は「剣号作戦」と呼称され、青森県の三沢基地を根拠地として作戦準備が進められることになった。米軍は、「義烈空挺隊」によるコマンド攻撃に衝撃を受けていたこともあり、海軍の「剣号作戦」に関する情報を探知すると、これを未然に防ぐために第38任務部隊の艦載機によって、8月9日・10日の両日にわたり、東北全域の日本陸海軍の航空基地に対する徹底的な攻撃を実施したのである<sup>30</sup>。

ところで、「酒田空襲」を行った米海軍艦載機部隊ではなく、いわゆる戦略爆撃を担当していた米陸軍航空隊の第20航空軍による空襲目標の選定について付言したい。

第20航空軍はB29を装備し、マリアナ諸島を基地として日本本土の空襲を行っていた部隊である。第20航空軍参謀のウィリアム・H・ブランチャード大佐は、1945年7月21日に、「Attacks on Small Urban Industrial Area」という

報告書を作成しているが、ここでは、昭和15年に実施された第5回国勢調査の結果に基づいて日本における人口が上位180位までの都市を選別している<sup>31</sup>。この180都市には、すでに大規模な戦略爆撃の対象となっている東京や大阪、名古屋などの大都市も含まれているが、1945年6月15日の大阪・尼崎空襲により、日本の大都市に対する空襲はほぼ完了したため、以降は中小規模の都市に対して攻撃を継続すべきとしている。攻撃方法としては、大都市に対して行った焼夷弾による空襲が最も効果的であるとして、これを中小都市にも適用すべきことが述べられ、選別された180都市について、B29による戦略爆撃に適さない都市の除外と攻撃目標の選別が進められている。参考までに、北緯39度以北の北東北・北海道の都市については、B29の航続力などから十分な爆撃を行うことが難しいとして17都市が除外されている<sup>32</sup>。また、地形等の関係から、B29が搭載していたAN/APQ-13レーダーの画像の状態が悪く、レーダー爆撃に適さないとして15都市が除外され<sup>33</sup>、すでに空襲で破壊した9の大都市や原子爆弾投下の目標とされた小倉や広島などの諸都市も除外した137都市が攻撃すべき中小都市として選定されていた。これらの180都市のうち、酒田市は160位、鶴岡市は140位にそれぞれ位置付けられ、攻撃目標に含まれていたため、戦争が継続していた場合、B29による戦略爆撃を受けた可能性は高かったといえよう。

## （2）日米の記録の対照から見る「酒田空襲」

本節では、日本側の「酒田空襲」に関する報告書である『酒田空襲状況』や、『酒田市事務報告書』に基づいて整理された『酒田市史』における空襲被害の状況と、米艦載機部隊の戦闘報告書に記載された攻撃結果の内容を対照することで「酒田空襲」の実態を明らかにすることを試みたい。

まず、『酒田空襲状況』に基づく空襲被害等に関する一覧は表4のとおりであり、『酒田市史』（『酒田市事務報告書』）に基づく空襲被害の一覧は表5のとおりである。

一方、米艦載機部隊の戦闘報告書における戦果の一覧は表6及び表7のとおりとなる。

「酒田空襲」をめぐる日米双方の資料を対照すると、倉庫や工場など、民家を

(表4)『酒田空襲状況』に基づく被害一覧

船舶	
貨物船 正吉丸（970トン）	沈没
油槽船 南輝丸（700トン）	沈没
海防艦	沈没
建物	
第一国民学校	全校舎大破
鉄興社大浜工場	建物半壊
帝国マグネシウム工場	建物半壊
船場町商業合資会社倉庫	倒壊
南亜企業倉庫	倒壊
上林製作所	倒壊大破
内務省酒田港工事事務所	全焼
四ヶ浦漁業組合事務所	半焼
民家等	多数被害
鉄道	
酒田駅・酒田港駅の貨車・客車	破損
その他施設	
酒田港のクレーン2基	破損
両羽橋	破損
人的損害	
死亡	16名
行方不明	14名
重傷	15名
軽傷	18名
戦果	
敵機2～3機撃墜	

除いた建物に対する被害／戦果の状況は、『酒田空襲状況』における被害状況と米軍の報告書における戦果報告は類似しており、米軍による戦果判定が一定の精度を有していたことが窺える。無論、港湾工事事務所や漁業会事務所、小学校など、工場や倉庫ではない建物を誤認している可能性が高い点や、酒田機関区における鉄道関連施設と酒田駅近傍の上林製作所の工場施設を混同している可能性が高い点など、きわめて正確な判定とは言えないと考えられるが、空襲当日の天候状況について米軍艦載機部隊は「Hazy（霞がかっている）」と報告

(表5)『酒田市史（酒田市事業報告書）』に基づく被害一覧

船舶		
正吉丸（970トン）	沈没	
第2南輝丸（834トン）	沈没	
酒田港湾浚渫船 神通丸（558トン）	損傷	
伊七波丸（873トン）	損傷	
天神丸（70トン）ほか機帆船3隻	損傷	
建物		
家屋 全焼	3戸	
半焼	5戸	
全壊	3戸	
半壊	5戸	
大破	14戸	
中破	8戸	
損傷軽微	72戸	
人的損害		
死者	28名	
負傷者	37名	

しており、雲が多いため、優先目標である飛行場への到達や効果的な攻撃が困難であるとして、酒田港の船舶に目標を変更していることなどを考慮すると、米軍の報告と実際の日本側の被害状況の間に大きな乖離があるとはいえない。

一方で、船舶に対する被害／戦果の状況は、『酒田空襲状況』や『酒田市史』における被害状況と米軍の報告書における戦果報告の間に乖離が生じているといえよう。「酒田空襲」における実際の船舶の被害は、貨物船の「正吉丸」とタンカーの「(第2) 南輝丸」の2隻が沈没し、「伊七波丸」、「天神丸」をはじめとする3隻の機帆船、酒田港湾浚渫船の「神通丸」が損傷しているが、米軍は、中型タンカー1隻<sup>34</sup>、小型貨客船1隻<sup>35</sup>、機帆船2隻<sup>36</sup>の沈没と、大型貨客船1隻<sup>37</sup>の大破、大型貨客船3隻<sup>38</sup>、中型貨客船1隻<sup>39</sup>、機帆船3隻以上<sup>40</sup>の小破を戦果として判定するなど、日本側の資料に基づく実際の損害よりもかなり多い被害を日本に与えたとしている。米艦載機部隊は日本軍の対空砲火について概ね低調であったとの評価であるにもかかわらず、船舶に対する戦果判定が実際の日本側の被害と大きく異なる点から、航空攻撃の戦果判定の困難さを窺うことができよう。

(表6) 米軍報告書における戦果一覧 (部隊別)

VBF-1		
FTC	小破	
VT-1		
SAS	沈没	
FTB	大破	
SD	沈没 (1隻) ・ 複数に損害	
Warehouse adjacent to docks	大破	
Factories adjacent to docks	大破	
VF-94 (第1次)		
FTB	小破	
FTB	小破	
Bridge at Sakata	大破	
Warehouse dock area	破壊	
VT-94		
Runway Tsuruoka Airfield	小破	
SD	沈没	
SD	小破	
SD	小破	
SD	小破	
Warehouse	炎上	
Warehouse	炎上	
Roundhouse	破壊	
Freight yard	炎上	
Locomotive	爆破	
Several freight cars	破壊 (複数)	
Box cars	小破 (複数)	
VF-94 (第2次)		
FTB	小破	
FTD	沈没	
Bridge Sakata	小破	
Warehouse	大破	

(表7) 米軍報告書における戦果一覧 (合計)

船舶	
沈没	
SAS (中型タンカー)	1隻
SD (機帆船)	2隻
FTD (小型貨客船)	1隻
大破	
FTB (大型貨客船)	1隻
小破	
FTB (大型貨客船)	3隻
FTC (中型貨客船)	1隻
SD (機帆船)	3隻以上
港湾施設	
破壊・炎上	
Warehouse (倉庫)	4棟以上
Factory (工場)	1棟以上
鉄道施設	
破壊・炎上	
Roundhouse (鉄道整備場)	1棟
Freight yard (貨物積込場)	1棟
Locomotive (機関車)	1両
Freight Cars (貨車)	数両
Box Cars (客車)	数両
その他	
Bridge (橋梁)	大破1・小破1
Runway (滑走路)	小破

なお、『酒田空襲状況』や佐藤甚太郎氏の回想で沈没したとされる海防艦であるが、真田慶久氏は、酒田に停泊していた海防艦とは、第40号海防艦であるとしている<sup>41</sup>。ただし、第40号海防艦については、同艦乗組員による航海記録に基づいて判断すると、昭和20年7月半ば以降の動向は以下のように整理できる<sup>42</sup>。

まず、「昭和20年7月13日午後1時、酒田入港」とあり、7月13日に酒田に入港しているが、「昭和20年7月17日午前7時、酒田出港。午後5時、新潟港より船団護衛。船団4隻、佐渡沖100カイリまで護衛」とあるように輸送船団の護衛のために一度酒田を離れ、「昭和20年7月24日午前5時、護衛を止め、酒田に向

け反転。午後5時30分頃、入港」と、7月24日に再び酒田に入港している。そして、「昭和20年7月28日午前4時12分、第105戦隊司令官・海軍少将松山光治、参謀乗艦。午後5時10分、酒田出港。第2掃蕩隊。海12（第12号海防艦—引用者註）、海40（第40号海防艦—引用者註）、海87（第87号海防艦—引用者註）の3艦にて対潜掃蕩」とあるように、7月28日には対潜任務のため再び酒田を出港している。その後は輸送船団護衛のために秋田県の船川に入港し、船川から北海道の小樽まで船団護衛任務に就いており、8月6日に小樽に入港している。「酒田空襲」が行われた8月10日は、「昭和20年8月10日午前3時、臨戦準備第一作業。午前4時、転錨、敵艦載機に備えて戦闘準備完成」とあり、小樽において米艦載機との戦闘準備を行っており、8月12日に小樽を出港するまで第40号海防艦は同港に停泊している。ちなみに、小樽出港後の第40号海防艦は8月14日午後7時に新潟に入港し、終戦を迎えている。その後、第40号海防艦は各地で戦時中に米軍によって空中散布された機雷の掃海任務に就いた後、昭和22年8月に戦時賠償艦として中華民国に引き渡され、「成安」と命名されて同国海軍に編入されている。

かかる第40号海防艦の航海記録に基づいて判断するのであれば、「酒田空襲」当日に吹浦沖で米軍機と交戦・沈没した海防艦は、少なくとも第40号海防艦ではないと判断できよう。また、「酒田空襲」を行った米艦載機部隊の報告書にも日本海軍の海防艦との交戦は記載されていないことから、実際には吹浦沖での海防艦の沈没はなかったと推測される。

海防艦の沈没と同様に、日本側の資料についても事実と異なる内容が含まれている。例えば、『酒田空襲状況』や真田氏の回想では米軍機を2～3機撃破したとしているが、米軍側の資料では、第94戦闘航空隊のF6F-5のうちの2機が2回目の空襲の際に20ミリ機銃弾を被弾したという報告はあるが、機体や搭乗員の喪失は報告されていない。また、真田氏は東根方面で落下傘降下した米軍機搭乗員について言及しているが、これは前日の8月9日の空襲において、尾花沢（玉野原）飛行場を攻撃中に被弾・不時着した米軍機搭乗員を誤認したものと推測される<sup>43</sup>。

また、『酒田空襲状況』や佐藤秀子氏の回想において、米軍が投下した爆弾について「五十七珎」としているが、「酒田空襲」において米軍が攻撃に用いたの



は、「AN-M64」500ポンド通常爆弾と、5インチ高速ロケット弾（HVAR）、そして.50口径機銃である。これらのうち、機銃弾は「爆弾」と誤認される可能性がないため除外すると、500ポンド爆弾とロケット弾のいずれを「五十七疋」爆弾としているのか、少々検討を加える。

「AN-M64」500ポンド通常爆弾は、全長144センチ、直径36.1センチで重量は242.68キロとなる。一方、5インチ高速ロケット弾は、全長182センチ、直径12.7センチで重量は63.4キロとなる。重量の点では5インチ高速ロケット弾に近いが、佐藤（秀）氏の回想では、あとから聞いた話として「不発弾は長さ一メートル、直径六〇センチ、重さ五十七キロもあったそうです」とあり、直径の違いが大きいいように見受けられる。この点に鑑みると、「五十七疋」爆弾とは、「AN-M64」500ポンド通常爆弾を指していると推測される。なお、重量については、「五十七疋」ではなく、57「貫目」であれば約215キロとなることから、単位の誤認があったのではないかと推測される。

さらに、日本側の資料の誤認として、「酒田空襲」を行った米艦載機部隊の規模等を挙げることができる。『酒田空襲状況』では、第1回目は16機、第2回目は11機の「グラマンF6F」による攻撃を受けたとしており、佐藤（甚）・佐藤（秀）両氏も「グラマン機」による攻撃であったと回想している。しかし、米軍の資料に明らかなように、第1回目の攻撃は、第1戦闘爆撃航空隊のF4U「コルセア」戦闘機8機、第1雷撃航空隊のTBF「アヴェンジャー」雷撃機12機、第94戦闘航空隊のF6F「ヘルキャット」戦闘機8機、第94雷撃航空隊のTBF「アヴェンジャー」雷撃機8機によって行われ、第2回目の攻撃は、第94戦闘航空隊のF6F「ヘルキャット」戦闘機11機によって行われている。当時の日本では、「グラマン機」といえば、一般的にはグラマン社のF6Fを指していた点からすると、第2回目の攻撃については、『酒田空襲状況』の内容は正確であるが、第1回目については、16機のF6Fではなく、F4U・TBF・F6Fから成る36機による攻撃であった。酒田警察署が把握していた状況が『酒田空襲状況』の記述であると考えられるが、実際には、酒田警察署の認識以上に規模の大きい空襲であったといえよう。

## おわりに

さて、本稿においては、「酒田空襲」の実態の解明を試みるべく、日米双方の資料から空襲の概要を整理した上で、両者を対照し、その考察を進めた。

まず、第1章では日本側の資料に基づき、「酒田空襲」の被害状況等についてその概要を明らかにした。2回にわたる米軍機の攻撃により、30名に及ぶ死者・行方不明者と、35名を超える重軽傷者を出した。また、2隻の船舶が沈没し、3隻が損傷したほか、港湾地帯の工場や倉庫、事務所をはじめ、多数の建物が被害を受け、酒田港のクレーンや酒田駅の鉄道車両、両羽橋なども損害を受けるなど、港湾地帯を中心に酒田市の広い地域が被害を受けている。

また、「酒田空襲」当時の酒田における防空体制についても検討を加え、米軍機に対して迎撃が可能な部隊は、陸軍の高射砲部隊や歩兵連隊の機関銃中隊、そして海軍の港湾警備隊などであったことを明らかにした。

次に第2章では、米軍の資料に基いて「酒田空襲」に関する米軍側の認識を明らかにした。その結果、米軍は船舶については4隻を撃沈したほか8隻以上の船舶に損傷を与えたと判定するなど、空襲で大きな戦果を挙げたと判断している。また、建物についても4棟以上の倉庫や工場、鉄道関連施設、橋梁などに損害を与えたと判定している。その一方で、日本軍の反撃については、正確ではあったが小規模であったと判定しており、損害としてF6Fのうちの2機が20ミリ機銃弾を被弾したが喪失した航空機や搭乗員はいなかったことを明らかにした。

第3章では、日米双方の資料を対照することで、「酒田空襲」の実態について考察を進めた。その結果、小学校や港湾地帯の事務所などを倉庫と誤認している点はあるものの、民家を除く大型の建物に対して与えた被害については、日本側の被害状況に近似しており、大きな乖離が見られなかったことを明らかにした。一方で、船舶については、日本側の資料に基づけば2隻の沈没と3隻の損傷であったのに対して、米軍は4隻の撃沈、1隻を大破、7隻以上を小破とするなど、過大な戦果判定が行われていたことを明らかにした。

また、「酒田空襲」の意図について、日本側では『日刊庄内』の社説に見られるように偶発的なものであったとする見解が見られるのに対して、米軍は、日

本陸海軍の空挺特殊部隊によるマリアナ諸島の航空基地への強襲攻撃を阻止するために、東北各地の飛行場と航空機に対する大規模な攻撃を実施していたことから、「酒田空襲」が偶発的なものではなかったことを明らかにした。さらに、米陸軍航空隊第20航空軍による「Attacks on Small Urban Industrial Area」に基づき、酒田市や鶴岡市が戦略爆撃の候補に含まれていたことを明らかにし、戦争が継続された場合は、B29による都市爆撃を受けていた可能性についても言及した。

この他にも、「酒田空襲」を行った米軍部隊の規模や、投下された爆弾について日本側の資料の誤認を明らかにし、また、米軍機との交戦の後、沈没したとされていた第40号海防艦の実際の動向などについても明らかにした。

かかる検証と考察を通じて「酒田空襲」における日米双方の誤認などを明らかにしたことで、本稿が「酒田空襲」の実態の解明の一助となれば幸いである。

---

<sup>1</sup> 酒田警察署『酒田空襲状況 昭和二〇年八月一〇日』酒田警察署、1961年（酒田市立図書館所蔵）

<sup>2</sup> 同前

<sup>3</sup> 酒田市史編さん委員会『酒田市史 改訂版』下巻、酒田市、1995年、796頁

<sup>4</sup> 真田慶久「酒田市における空襲体験記」（酒田市古文書同好会編『方寸』第四号、酒田市古文書同好会、1972年に所収）、175-176頁

<sup>5</sup> 装備していた高射砲については、真田慶久「酒田の高射砲陣地」（酒田市古文書同好会編『方寸』第六号、酒田市古文書同好会、1978年に所収）80頁において、「主力装備は九九式（式の誤字と推定される一引用者註）八糎高射砲各六門」と述べられていることに基づく。同砲は、ドイツクルップ社の高射砲である8.8cmSK /C30をライセンス生産したもので、太平洋戦争中の高射砲部隊の主力装備の一つとなっている。

<sup>6</sup> 佐藤甚太郎「酒田空襲 その一 漁業会炎上」（山形放送編著『聞き書 昭和のやまがた50年』東北出版企画、1976年に所収）、167-169頁

<sup>7</sup> 前掲「酒田の高射砲陣地」、80頁

<sup>8</sup> 山形県警察史編さん委員会『山形県警察史』下巻、山形県警察本部、1971年、780頁

<sup>9</sup> 佐藤秀子「酒田空襲 その二 夫を直撃した不発弾」（前掲『聞き書 昭和のやまがた50年』）、170-171頁

<sup>10</sup> 前掲『山形県警察史』下巻、781-782頁

<sup>11</sup> 真田慶久「終戦時の酒田」（酒田市古文書同好会編『方寸』第五号、酒田市古文書同好会、1974年に所収）、176頁

<sup>12</sup> 留守業務局『課別部隊通称番号一覧表（全軍のもの） 昭和22年8月1日』（国立公文書館アジア歴史資料センター：原史料は防衛省防衛研究所所蔵）

<sup>13</sup> 青森港湾警備隊『昭和二十年八月三十一日 兵器弾薬現在数調』（国立公文書館アジア歴史資料センター：原史料は防衛省防衛研究所所蔵）

<sup>14</sup> 神戸港湾警備隊『神戸港湾警備隊』（国立公文書館アジア歴史資料センター：原史料は防衛省防衛研究所所蔵）によれば、終戦時、神戸港湾警備隊が保有していた装備は「12.7糎高角砲」、「短12糎砲」、「8糎砲」、「8糎迫撃砲」、「簡易迫撃砲」、「25糎機銃」、「13糎機銃」、「20糎機銃」、「7.7糎機銃」、「簡

易擲弾筒」、「小銃」であり、対空兵器以外にも迫撃砲や擲弾筒、小銃などの陸戦用兵器を装備していたことが分かる。

- <sup>15</sup> 第38任務部隊における任務群の指揮官や各部隊の構成などについては、Morison, Samuel Eliot, *History of United States Naval Operations in World War II* Vol.XIV, Castle Books, 2001（以下、『モリソン戦史』第14巻とする）、310頁に基づく。なお、艦船の名称に「(II)」の記載がある場合は、同名の艦船が第2次世界大戦中に沈没し、2代目であることを表している。

- <sup>16</sup> 「Photographic intelligence center report No. 6, May 1945, Japanese shipping. Report No. 14-f (14), USSBS Index Section 6」(『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey ; Entry 46, Security-Classified Intelligence Library. 1932-1947』)(国立国会図書館デジタルコレクション：原史料は米国国立公文書館所蔵)

- <sup>17</sup> 第1戦闘爆撃航空隊に関する報告書は、「Aircraft Action Report No. 15-45 1945/08/10 : Report No. 2-d(16) : USS Bennington, USSBS Index Section 7」(『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey ; Entry 55, Security-Classified Carrier-Based Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports, 1944-1945』)(国立国会図書館デジタルコレクション：原史料は米国国立公文書館所蔵)である。以下、「VBF-1報告書」とする。

- <sup>18</sup> 「VBF-1報告書」においては、航空機を「FG-1D」と表記している。これは、チャンス・ヴォート社が開発・製造したF4U「コルセア」戦闘機の改良型であるF4U-1Dを、グッドイヤー社がライセンス生産した機体であることを示す表記となるため、本稿では「F4U」として扱うこととする。

- <sup>19</sup> 第1雷撃航空隊に関する報告書は、「Aircraft Action Report No. 41 1945/08/10 : Report No. 2-d(16) : USS Bennington, USSBS Index Section 7」(『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey ; Entry 55, Security-Classified Carrier-Based Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports, 1944-1945』)(国立国会図書館デジタルコレクション：原史料は米国国立公文書館所蔵)である。以下、「VT-1報告書」とする。

- <sup>20</sup> 「VT-1報告書」においては、航空機を「TBM-3」及び「TBM-3E」と表記しているが、これはグラマン社が開発・製造したTBF「アヴェンジャー」雷撃機を、ゼネラル・モーターズ社がライセンス生産し、改良を加えた機体であることを示す表記となるため、本稿では「TBF」として扱うこととする。

- <sup>21</sup> 「VT-1報告書」中における「Flak」とは、ドイツ語で対空砲を意味する「Flugabwehrkanone」の略語であり、しばしば連合軍においても使用された。

- <sup>22</sup> 先発した第94戦闘航空隊に関する報告書は、「Aircraft Action Report No. VF94#26 1945/08/10 : Report No. 2-d(40) : USS Lexington, USSBS Index Section 7」(『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey ; Entry 55, Security-Classified Carrier-Based Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports, 1944-1945』)(国立国会図書館デジタルコレクション：原史料は米国国立公文書館所蔵)である。以下、「VF-94①報告書」とする。

- <sup>23</sup> 第94雷撃航空隊に関する報告書は、「Aircraft Action Report No. VT94#8 1945/08/10 : Report No. 2-d(40) : USS Lexington, USSBS Index Section 7」(『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey ; Entry 55, Security-Classified Carrier-Based Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports, 1944-1945』)(国立国会図書館デジタルコレクション：原史料は米国国立公文書館所蔵)である。以下、「VT-94報告書」とする。

- <sup>24</sup> 「VT-94報告書」においては、航空機を「TBM-3E」と表記しているが、「VT-1報告書」と同様に本稿では「TBF」として扱うこととする。

- <sup>25</sup> 当時、鶴岡には陸海軍の飛行場は存在しておらず、米軍が何を「Tsuruoka Airfield」と認識していたのかは不明である。

- <sup>26</sup> 後発の第94戦闘航空隊に関する報告書は、「Aircraft Action Report No. VF94#27 1945/08/10 : Report No. 2-d(40) : USS Lexington, USSBS Index Section 7」(『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey ; Entry 55, Security-Classified Carrier-Based Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports, 1944-1945』)(国立国会図書館デジタルコレクション：原史料は米国国立公文書館所蔵)である。以下、「VF-94②報告書」とする。

- <sup>27</sup> 米軍が20ミリ機銃弾を被弾したと判断している点から、主に口径20ミリ以上の機銃が発射可能となる炸裂弾による被害を受けたことが推定される。このことから、酒田に駐屯していた「新潟港湾警備隊」は、航空機搭載用に開発された海軍の99式20耗機銃を対空兵器として装備していた可能性も考えられる。
- <sup>28</sup> 『日刊庄内』昭和30年8月10日付、社説
- <sup>29</sup> 「VT-94報告書」において、同時に出撃した部隊について「F6F-5+TBM-3E(AG-31)」という記載があるが、同部隊が所属する母艦の名称は「USS SAN JACINTO」と記載されている。このことより、「AG-31」とされている戦闘機と雷撃機の混成部隊は、「サンジャシント」の艦載機であることが明らかとなり、「AG-31」とは「ペローウッド」の艦載機による混成部隊を指していることから、「VT-94報告書」の誤記であると判断できる。このため、この部隊は正確には「サンジャシント」の艦載機である「VF-49」と「VT-49」から成る「AG-49」であると考えるべきであろう。
- <sup>30</sup> 前掲『モリソン戦史』第14巻、332頁
- <sup>31</sup> 奥住喜重『B-29 64都市を焼く 1944年11月より1945年8月15日まで』揺籃社、2006年、104-105頁
- <sup>32</sup> 前掲同書、107-108頁
- <sup>33</sup> 前掲同書、108頁
- <sup>34</sup> 「VT-1報告書」において、沈没と判定した「SAS」を2000総トンの船舶と判断していることから、中型タンカーとした。
- <sup>35</sup> 「VF-94②報告書」において、沈没と判定した「Fox Tare Dog Underway at Sakata」を500総トンの船舶と判断していることから、小型貨客船とした。
- <sup>36</sup> 「VT-1報告書」において沈没と判定した「SD」及び「VT-94報告書」において沈没と判定した「Sugar Dog」を100総トンの船舶と判断していることから、機帆船とした。
- <sup>37</sup> 「VT-1報告書」において、大破と判定した「FTB」を6000総トンの船舶と判断していることから、大型貨客船とした。
- <sup>38</sup> 「VF-94①報告書」において、小破と判定した「F.T.B.」2隻についてそれぞれ5000総トンの船舶と判断し、また、「VF-94②報告書」において、小破と判定した「Fox Tare Baker at anchor-Sakata」を5000総トンの船舶と判断していることから、大型貨客船とした。
- <sup>39</sup> 「VBF-1報告書」において、小破と判定している「FTC in Sakata Harbor」を4500総トンの船舶と判断していることから、中型貨客船とした。
- <sup>40</sup> 「VT-1報告書」において、小破と判定している複数の「SD」及び、「VT-94報告書」において小破と判定している3隻の「Sugar Dog」について、それぞれ100総トンの船舶と判断していることから、機帆船とした。
- <sup>41</sup> 前掲「終戦時の酒田」、176頁
- <sup>42</sup> 花井文一『武勲艦航海日記 伊三八潜、第四〇号海防艦の戦い』（光人社NF文庫）（潮書房光人社、2017年）の173頁より181頁の「第五章 航海日記（一）」において、「操舵員の田中兵曹が、非番のとき『航海日記』を毎日記帳していたので、第四〇号海防艦の詳しい艦暦と行動、出入港、船団および護衛艦などが明細にわかるのである。」として、昭和19年9月7日に同艦が大阪藤永田造船所で起工されてから、昭和20年8月25日に舞鶴で乗組員が復員し、その後、同年9月10日に米軍の命令で乗組員を再度招集して第一掃海部隊に編入されるまでの記録が記載されている。本稿における第40号海防艦の動向は、これに基づいている。
- <sup>43</sup> 前掲『山形県警察史』下巻、783-785頁